

## 釧路空襲体験談

佐藤 泰子

釧路空襲が起きた当時、私は5歳でした。

市立病院の坂がまだ山だった頃、入舟にある小学校付近の防空壕に身を隠していました。山を掘って作った防空壕なので、中は薄暗く、山水が滴っていました。中を照らすのは一本のろうそくの光だけでしたが、それでも見つからないように、布をかぶせてさらに暗くしていました。

空襲で入舟が攻撃を受けたため、病院の方にある防空壕を目指し、防空頭巾をかぶって、母に連れられて逃げました。道中も火の粉が舞っていたので、水にくぐらせた布でやけどをしないように身を守りました。顔を上げると、B-29が頭上近くを旋回しており、アメリカ兵の笑う顔が見えたのを覚えています。街には大きな建物がなかったので、北大通も末広町のあたりも、炎で真っ赤になっているのが見えました。

逃げ回ったり防空壕の中にいたりすると土で体が汚れるため、ドラム缶の風呂に入っていました。当時の食料は大豆と煮干しで、家族で分け合っていました。食料にしらみがわいていることもありましたが、それでも代わりはないので、払いのけて食べていました。甘いものはないので、どうしても食べたくなれば、茶色のちり紙を食べていました。

兵隊を増やすために「子を産め」と言われる世の中で、周りの家庭も兄弟が7～8人いるのが当たり前でした。当時のランドセルは、今のような革製品ではなく厚紙で作られたものと、手提げかばんを使っていました。そのため教室には子どもが多く、厚紙のランドセルを落とすと踏まれて、すぐに使い物にならなくなっていました。

戦時中を知らない人たちの暮らし方は、贅沢すぎると感じる場合があります。今の子どもたちは学校や親が世話をしてくれるので、甘えた環境で育っていると思います。当時のように、火の粉が舞う中を自分の足で走ることが、今の子どもたちにできるのでし

ようか。

戦争には恨みしかありませんが、誰かを責めることもできません。ロシアとウクライナの戦争もそうですが、原因は人間の「欲」だと思います。土地への欲に対する我慢と理性が、まったくないように感じます。